

# 野鳥たより

—北海道—

第43号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和56年3月21日



コミミスク 沙流川河口(富川) 1981. 2. 17 撮影 平井さち子



# も く じ

- 探鳥地案内 (湧洞沼) ..... 2
- わが家をめぐる鳥 ー根室市東梅ー ..... 高田 勝 ... 3
- 松前町と野鳥 ..... 熊谷芳昭 ... 7
- イカルチドリの繁殖記録 ..... 小野登志和 ... 8
- やぶにらみ野鳥撮影論 (3) ..... 小山政弘 ... 9
- チェックリストその後 ..... 小川 巖 ... 9
- 探鳥会報告 ... 藤の沢、野幌、野幌森林公園を歩きましょう ... 10
- 新年懇談会報告 ..... 11
- 探鳥会案内 (56年度分) ..... 12
- 鳥民だより ..... 12

## 湧 洞 沼

### 探鳥地案内

◆位置 中川郡豊頃町

◆概況 面積 373 ha、周囲 17.5 km、最深部約 2 m、北部を湿原、東西を丘陵に囲まれ、南東部は砂丘を隔て

て、太平洋に接する海跡湖である。砂丘部には、ハマナス、ヒオウギアヤメ、ハマエンドウ等が分布し、原生花園状となっている。湖面、沼の周辺及び海上も含めると 115 種以上の鳥類の記録があり、湿原では、夏には幼鳥を伴ったタンチョウを見ることがあり、砂丘部の草原では、カタキツネが戯れ、沼の中をエゾシカがたむろしていることもある。

◆交通 帯広市より車にて豊頃町茂岩経由で 55km (約 1 時間半) 豊頃町茂岩より道道 73 号線及び 300 号線を経て国道 336 号線を横断し海岸に向かって 4 km。

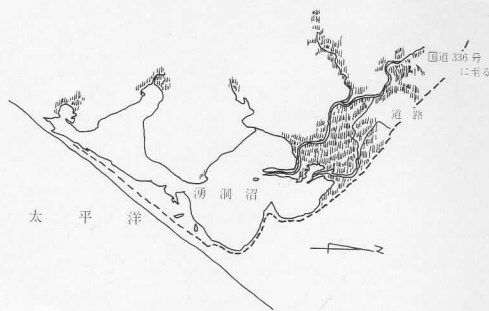
◆その他 国道 336 号線を通ると北東に長節湖、南西に生花苗湖、西にキモントーがあり、道中も含めて、いずれも探鳥が楽しめる。

◆湧洞沼で見られる鳥類 アビ ハンジロアビ カイツブリ アカエリカイツブリ ウミウ ヒメウ アオサギ コクガン マガン ヒシクイ オオハクチョウ コハクチョウ マガモ カルガモ コガモ ヨシガモ オカヨシガモ オナガガモ シマアジ ハンビロガモ ホシハジロ キンクロハジロ スズガモ クロガモ ビロードキンクロ ホオジロガモ ミコアイサ ウミアイサ カワアイサ ミサゴ トビ オジロワシ オオワシ オオタカ ハイタカ ノスリ ハイイロチュウヒ ハヤブサ チゴハヤブサ タンチョウ パン

⑬

オオバン コチドリ イカルチドリ シロチドリ メダイチドリ ムナグロ ダイゼン キョウジョシギ トウネン ウズランギ ハマシギ サルハマシギ オバシギ ミユビシギ エリマキシギ キリアイ ツルシギ アカアシシギ アオアシシギ

タカブシギ キアシシギ イソシギ オグロンギ オオソリハシギ ホウロクシギ チュウシャクシギ ヤマシギ タシギ オオジシギ ユリカモメ セグロカモメ オオセグロカモメ シロカモメ カモメ ウミネコ ズグロカモメ ミツユビカモメ アジサシ エトロフウミスズメ キジバト アオバト アマツバメ アカゲラ オオアカゲラ コアカゲラ コゲラ ヒバリ ツバメ ハクセキレイ ヒヨドリ モズ ノビタキ アカハラ ツグミ シマセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ センダイムシクイ エナガ ハシブトガラ シジュウカラ ゴシユウカラ キバシリ カシラダカ アオジ オオジュリン など

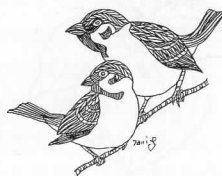


平 沼 裕 080 帯広市西16条南2丁目

# わが家をめぐる鳥

— 根室市東梅 —

高 田 勝



風蓮湖の南部が、別当賀川の川口あたりから急に狭まって、東端の海との開口部に向けて川のような様相を呈するところに、酪陽と東梅の二つの部落があります。

酪陽は、その名の通り、酪農家ばかりの部落で、それは当然のことながらまとまった集落の形は為しておらずおよそ1キロから2キロくらいの間隔で十軒あまりの家が散在しているところです。

一方東梅は、そのアイヌ語源であるトゥ・パイエー湖に出るところ一の名が示すように、湖畔ギリギリのところ数十軒が集まる漁師部落です。

そして、この酪陽と東梅両部落の中間に、ペンケ東梅もしくはコタン東梅と呼ばれる、人家九軒の集落が忘れられたように、ちんまりと寄りあっています。

ペンケ東梅……つまり「上の東梅」は、東梅の分家部落なのです。本家より20メートルばかり高度の高いところにあるので、通称「山東梅」といわれます。山東梅は東梅の分家ですから、九軒の家も皆、生業は漁業です。

しかし、東梅と違って、山東梅は海から少々離れています。漁師たちは、毎日山から海に出かけ、海から山に魚を持ち帰るのです。オジロワツミたいに。

なぜ海から離れたところにあるのかというと、じつは20年ほど前までは酪農をやっていたところだったからです。規模の小さな、ほとんど零細といっていけるくらいのベコ屋さんたちが、後年見切りをつけて漁業に移ったのです。

ですから、山東梅のたたずまいは、漁師風ではなく、酪農風です。旧馬屋や旧牛舎に漁網がしまっていてあたり塩魚が貯蔵してあったりします。家のまわりには牧草畑が広がっていて、そこで魚を干したりもします。自家用野菜を作る程度の畑も、どこ家にもあります。まさに酪陽と東梅の“中間”なのです。

さて、この山東梅では、九軒の家の他に、もう一軒がポツンと離れて、危うい姿で建っています。国道からいちばん離れ、家の前の砂利道は車よりもキツネやウサギの方がよく通る、というようなところなんです。そして、それなのに、その家には『風露荘』と書かれた板がぶら下げられ、民宿という怪し気なことで生計の一部を立てているというのです。誰がこんな所に来るというのか……。

この家の周囲も、昔の名残を留めるように牧草畑が広

がっています。しかし、その大部分は他の酪農家に貸すというようなことをしてこなかったため、今ではチモンーたちはエゾリンドウやクサイチゴやナガボノシロワレモコウやフキや……その他モロモロの在来植物の勢いに完全に押されてしまいました。土地台帳に「荒地」と不名誉な誤記をされてしまう、豊かな草原に戻ったのです。

そして、その草原を取り囲むように、針葉と広葉の林、両者混交の林がつづきます。二次林と思われるものが多いのですが、環境に良いアクセントをつけてくれているのは事実です。

あまり自慢できないようなシロモノですが、沢も一本あります。流れているというより、あるといった方が正直な訳です。流れらしく流れているのは、雪解けの頃と大雨の後だけです。それでも、やっぱり水があるというのも、捨て難いものですし、そこにミズバショウやエンコウソウがどっさり咲くというのは、控え目にでも「どうです」と弁護してやりたいくらいのもんです。

この沢の付近にある林は、おおむねヤマハンノキを主体としていて、枯木の多いことが、じつはポイントなのです。

民宿と称する家……それはもちろんぼくの家なのですが、それはこの沢とヤマハンノキの林からほんの数メートルのところであり、いやらしい言い方をすれば「同じ敷地内」なのです。借地ですが……。

さて、ここに住んで、ぼくは漁師から魚をもらい、酪農家からは牛乳をもらうという、まことにもって“中間の粹”のような暮らしをしているわけですが、なんと、かくも不便な所で開いた民宿にも、人は四季折々に集まるのです。原因は、鳥が多いからです。当然、集まる人のほとんどは、温泉やバーより鳥を見ていた方がよいという、変った人ばかりです。（ぼくは、シーズンオフになったらホテル・サンパレスに行って滑り台のある風呂に入り、バーにたれ込めてジン・ライムのチェイン・ドリンクなぞしてやろうという夢ばかり見るのですが。）

鳥の出方というか分布のしかたが、ここはまた“中間的”なのです。海の鳥も山の鳥も、草原の鳥も森の鳥も現われるのです。後に掲げた一覧表にあるように、たとえばヒドリガモが黒文字扱いになったりするのは。黒



文字というのは、わが家から見える範囲内で、地上もしくは樹上に一瞬たりとも舞い降りた鳥が、居間の表に黒いマジックで書きこまれているからです。上空を通過したり、地上スレスレで足を下げれば畑のニンジン

でも引っこ抜けそうな所を飛んでるのに羽を休めようとしないうち「冷やかし」専門の鳥（オオタカなど）は、危険分子として赤字で表わします。

ヒドリガモは、上空はシーズンにはたくさん通過しますが、ある日一羽の雄が何を思ったか、窓の下のイチゴ畑に降りたのです。べつに弱っていたというわけではなくイチゴ盗みにきたという証拠も残さずに……。

それから、ペニマシコが囀っていたノリウツギのそばのヤマハンノキにクマガラが来たこともありましたし、オオジシギとルリビタキが同じ畑で餌をあさっていたこともありました。

声を聞いただけですが、この地では稀なホトトギスやヨタカの記録もあります。シマフクロウは、いくらなんでも距離が遠すぎるので、記録には入れていませんが、時折聞くことがあります。

総じて、明るいどかな原野に囲まれて……といった風情のわが家で、百をこす種類の鳥が見聞されているという事実は、もちろん大いなる自慢としてよいのかもしれませんが、それ以上にぼくが喜んでいるのは、このわずか3 ha程度の観察範囲の中で「繁殖」してくれる鳥の多いことの方です。ただ「居る」とか「見た」とか「止まった」ということだけではなく、「繁殖」ということになると、「よくぞここを選んでくれた」という感謝の念のようなものが湧いてくるのです。

ハンボソガラス、ムクドリ、コムクドリ、ニューナイスズメ、アオジ、ペニマシコ、ゴジュウカラ、ヒガラ、ハシブトガラ、エゾセンニュウ、アカハラ、トラツグミ、ノビタキ、ノゴマ、モズ、ビンズイ、ヒバリ、コゲラ、アカゲラ、アリスイ、オオジシギ、エゾライチョウ……なんと、22種類もがぼくの家まわりで子孫を殖やしてくれているのです。そして、トラツグミとノビタキとモズそれにエゾライチョウの4種を除けば、みな庭先といっていっくらいの所に巣を構えた記録があるのです。

言い訳じみてきますが、四季を通じて百種を越す鳥が庭先をぶらつくだけで見られ、しかもその2割が繁殖までしているとあっては、もうよそへガツガツ探鳥に行こうという気も、あまり起こりません。

では、この恵まれた条件を活かして、庭に来る鳥をいろいろな角度から詳しく観察しているのかというと、それもまったくです。「これだけ居るんだから、まあその

うちポツポツ」という気と、「これだけ居たんじゃ、目移りして、何をどうしていいのやら」という気が半々なのです。

ただ、どちらかという森林性の鳥が好きならばとすれば、ケラ類とカラ類が豊富なだけに、せめてそれらのうちの1種でもライフ・サイクルを調べてみよいか、とは思いますが。まあ、いつの話になることか。

ケラ類やカラ類の多いのは、前にちょっと触れたヤマハンノキの枯木の存在と無関係ではありません。この辺り、ともかく戦後の開拓期に巨木は根こそぎ伐られていて、枯木すらもうそんなに見当らなくなっているの、見すばらしい沢のそばの見すばらしいヤマハンノキの枯木でも、彼等彼女等にとっては貴重なのでしょう。ある枯木は、アカゲラが巣穴を掘り、翌年コゲラがまた巣穴を掘り、その巣穴をニューナイスズメが横取りし、それをまたコムクドリが奪い取って大穴にしてしまい、ために三年目にはそこからポッキリ折れてしまったのですが、残った方にあったアカゲラの古巣をハシブトガラが利用し、折れた方はぼくが庭先に「植え」て、冬の間豚脂を塗り付けた給餌台にし、それは今でもアカゲラやヤマゲラにせせせとつかかれています。これほどムダなく利用される枯木も、そうはないでしょう。裏返せば、それだけ枯木は期待されているわけです。「庭に枯木を植えましょう」といったら、大方には笑われるでしょうが、じつはたいへん意味のあることではないかと思えます。

貯木場や農家の庭先に、ほんとうに邪魔物扱いされている枯木やウロのある木を見かけます。大半は何かのついでに燃されてしまうような、そんな枯木を見るたびに「もったいない」と思い、「この木なら10年」とか「この木なら、この穴に脂、この窪みにヒマワリの種が置ける」と思うのです。

ともあれ、枯木が何本かでもあるおかげで、ぼくはお気に入りたちと付き合うことができ、なんとなく森の中に居る雰囲気も味わうことができるという寸法です。

枯木とともに、わが家周辺の鳥たちの支えになっているのが50坪ほどの菜園です。菜園という聞きがいいのですが、実態は雑草の中に、たまに野菜を見出すことができるといったものなのですが、この取り合せがヨロシイらしいのです。わが家の方針として、菜園にはいっさい薬を使いません。肥料は、手に入るうちは馬糞。入手困難となった現在は油カスや鶏糞を買ったりしますがともかく有機質のものしか使いません。最近港からヒトデの捨ててあるのを拾ってきて撒いていますが、これは原爆的効果が出ます（もちろん雑草にも！）。殺虫剤とか除草剤は絶対使いませんから、ヨトウムシなんか大喜びで、昼間からモリモリ盗み食いです。夜盗虫じゃなくて、昼夜盗虫です。その虫食い跡を嫌ってキャベツの

皮を剥こうものなら、芯しか残りません。

雑草の方は、横綱級がナギナタコウジュとシロザで、他にヨモギ、イラクサ、ハコベなどがあります。ただでさえ生育旺盛なところへ、たっぷり肥料をもらうのですから、それはすさまじいばかりの繁茂ぶりです。アスパラガスの葉が見えなくなる、といえはおわかりでしょうか。そして、これもわが家の方針として、雑草はできるだけ抜きません。理由は、面倒臭いからです。それに、時々ハコベやシロザは食べてしまいますから、一種の野菜のようなものです。

この菜園風草地でもう一つ忘れてならないのは、土壌中のミミズの豊富さです。もともと牛舎の建っていた跡地なのでミミズは多かったのですが、釣り人にもらったりする使い残りのミミズをせっせと戻してやったのが効を奏したか、今では太いの細いの、長い短かいのがウヨウヨするようになりました。釣り屋で売っているミミズは最近中国あたりから輸入されるものが多いと聞きましたが、別に国際紛争も起こさず共存しているようです。

このように、菜園では毛虫・芋虫・種子・ミミズが、キャベツやニンジンよりはるかに幅を効かしているのです。鳥が放っておく訳がありません。とくに、ナギナタコウジュとシロザの種子は、餌の乏しい冬、ベニヒワやマヒワを強く誘惑します。嘴の大きなウソも、餌台のアワやヒエには目もくれずに、ケン粒ほどのナギナタコウジュにこだわります。そういえば、この鳥は春先、やはり種子の小さなフキノトウによくやってきます。あの嘴は、単なるコケ威しなのでしょう。

百羽二百羽のベニヒワの群れがナギナタコウジュに3日も4日もついてると、春にはもう一粒残らず食べられていて、ナギナタコウジュついに絶え滅びる気がするのですが、割に雑な食べ方をするらしく、まるで何事もなかったような大群落をまた必ず作ってしまいます。

もっとも、1年や2年平気で休眠する種子も多いそうですから、いちがいにベニヒワ共のマナーを責める訳にはいきませんが。

そうそう、ベニヒワといえば、こんなことがありました。ある年、もう4月に入って、周辺にベニヒワを見ることはほとんど無くなっていた頃、庭には4羽のベニヒワが居ついていました。どれも♀タイプです。もう、ナギナタコウジュもシロザも種子は無く、4羽は餌台のアワについていたのです。そこへ、いきなりオオタカがやってきました。餌台のベニヒワをねらったのに違いありません。驚くべきことに、彼は、餌台と地上との間わずか50cmほどのすき間をクリアしたのです。「アッ」と息を飲んで、その素晴らしい身のこなしに見とれていたのですが、ベニヒワはどこかへ逃げてしまいました。しかし、翌日餌台に来たのは3羽だけ。そしてオオタカが現

れて、翌日は2羽。とうとう1羽だけにまでなっていました。実際にオオタカがベニヒワを捕える現場は見られませんが、彼があつた可憐な小鳥をつかんで、どこかの枝にどっかと腰を据えたのは間違いなさそうです。ぼくはといえば、ベニヒワの心境などにお構いなくオオタカが出現するたびに、「黒文字、黒文字」と、満腹オヤジが揚子を欲しがっているみたいにつぶやきつぶけていたのですが、いつも視界からそのまま去って行ってしまいました。いまだに、赤文字です。

最後に残った1羽は、それからしばらくして姿を消しました。もちろん、北へ向かったのだと思います。ところが、6月になって、もうあたりの緑もすっかり濃くなった頃、餌台にひょっこり1羽のベニヒワがやってきたのです。きれいな夏羽になっているそのベニヒワは、三十分ほどそこに居て、いずこかへ飛び去りました。ひょっとしたら、あの時からずっと居つづけていたのではないだろうか、と今でも思えてなりません。

餌台は、毎年11月頃から翌4月頃までを中心に稼働させています。U字形に窪んだ1メートルばかりの長さの自然木2本は、アワやヒエ、ご飯にパン、そして果物を載せます。アワ等はペット・ショップで扱っている小袋入りのものですが、一冬にだいたい50~60袋を消費します。果物は八百屋に話をつけておいて、痛んだものももらってくるのですが、いつもミカンやリンゴばかりとは限りません。洋ナシやらバナナやら、キウイ・フルーツまであります。雑多に置いてやると、どこかに鳥はつきませんが、いままでのところバナナの利用者はなく、これは庭に来る3匹のリスのうちの1匹の好物となっているだけです。ミカンは餌台の上と下に山にしておくと、昼間はツグミやヒヨが上のを食べ、夜はウサギが下のを食べに来ます。ミカン専門に食べるリスもいます。

その他には、棒杭と枯木に豚脂をやっていますが、カラスの多い所なので、丈夫で目の細い金網を使い、かなりガッチリした入れものを作っています。脂は、だいたい5カ所もやっておけば足りているようですが、2年前のように7羽ものヤマゲラが居ついてしまうとお手上げです。なにしろ、ヤマゲラに勝てるのはカラスとリスだけなので、他の鳥が寄りつけないのです。カケスさえ。

枯木には、豚脂を鍋で溶かしてから冷ましたもの……つまりラードを塗り込みますが、鍋で長めに熱すると適度に褐色がかってくるので、塗っても目立ちません。牛脂——ヘットの方は、冷めてからえらく堅くなり、塗ってもポロポロ崩れるので、あまり使いません。

ヨブスマソウやエゾニウなどの太い枯茎にラードを



つめ、適当に穴を開けて雪上に立てておくと、カラ類がよく来ます。じつは、コアカゲラをなんとか脂につかせようといういろいろ考えた揚句に思いついたテなのですが、しかしこれは、カラスに見つかったらそれまでですし、夜イヌなども持って行ってしまいます。

アワやヒエは、いくら鳥たちがせっせと食べても、かなりの量が地上に残り、それがそのまま伸びて穂をつけます。これを、刈り取って、日蔭で逆さに干しておき、雪がくると束ねて雪の上を立ててやります。量は知れたものですが、風情はあると思っています。それに、名前はわかりませんが、アワやヒエ以外にもいろんなイネ科の種子がまじっているようで、面白い形の種が何本も出てくると楽しくなります。

まあ、ざっとこんな具合で、庭先およびその周辺には

その環境にひかれてくるもの、餌にひかれてくるものが四季を通じてやってきてくれるわけです。

ほんとうは、昔見たディズニー映画『われらキャロウェイ』のように、ガンのためにトウキビ畑をこしらえたりもしてみたいのですが、そこまで考えると、さしものわが庭も、あまりに狭く、単調なものに思えてしまって愕然としてしまうのです。

× × × ×

とりとめもなく、貴重なページを浪費してしまいました。もっとガクジュツ的に、と思ったのですが、無から有の生まれようはずもなく、その点はいずれまたということで、最後に庭先でこれまでに記録することのできた鳥のリストを掲げて、せめてそれらしく終らせたいと思います。

○風露荘で観察された鳥 (1975年5月より)

注：( )内の通は、上空通過、繁は繁殖確認、声は声のみ確認。範囲は、庭先から見渡せる範囲(約3ha)

サギ科	カモメ科	ツバメ科	66 ウグイス
1 アオサギ(通)	24 オオセグロカモメ(通)	44 ショウドウツバメ	67 エゾセンニュウ(繁)
ガンカモ科	25 シロカモメ(通)	45 ツバメ(通)	68 シマセンニュウ
2 ヒシクイ(通)	ハト科	セキレイ科	69 マキノセンニュウ
3 オオハクチョウ(通)	26 キジバト	46 キセキレイ(通)	70 メボソムシクイ
4 ヒドリガモ	27 アオバト	47 ハクセキレイ	71 エゾムシクイ
ワシタカ科	ホトトギス科	48 ビンズイ(繁)	72 センダイムシクイ
5 ミサゴ(通)	28 ジュウイチ(声)	49 タヒバリ	73 キクイタダキ
6 トビ	29 カッコウ	ヒヨドリ科	74 キビタキ
7 オジロワシ	30 ツツドリ	50 ヒヨドリ	75 サメビタキ
8 オオワシ	31 ホトトギス(声)	モズ科	76 エゾビタキ
9 オオタカ(通)	フクロウ科	51 モズ(繁)	77 コサメビタキ
10 ツミ(通)	32 フクロウ	52 アカモズ	エナガ科
11 ハイタカ	ヨタカ科	53 オオモズ	78 エナガ
12 ノスリ	33 ヨタカ(声)	レンジャク科	シジュウカラ科
13 ハイロチュウヒ(通)	アマツバメ科	54 キレンジャク	79 ハシブトガラ(繁)
14 ハヤブサ(通)	34 ハリオアマツバメ(通)	ミソサザイ科	80 コガラ
15 コチョウゲンボウ(通)	35 アマツバメ(通)	55 ミソサザイ	81 ヒガラ(繁)
ライチョウ科	キツツキ科	ヒタキ科	82 シジュウカラ
16 エゾライチョウ(繁)	36 アリスイ(繁)	56 コマドリ(声)	ゴジュウカラ科
ツル科	37 ヤマゲラ	57 ノゴマ(繁)	83 ゴジュウカラ(繁)
17 タンチョウ	38 クマゲラ	58 コルリ	キバシリ科
シギ科	39 アカゲラ(繁)	59 ルリビタキ	84 キバシリ
18 タカブシギ(通)	40 オオアカゲラ	60 ジョウビタキ	メジロ科
19 アカアシシギ(通)	41 コアカゲラ	61 ノビタキ(繁)	85 メジロ
20 キアシシギ(通)	42 コゲラ(繁)	62 トラツグミ(繁)	ホオジロ科
21 チュウシャクシギ(通)	ヒバリ科	63 アカハラ(繁)	86 ホオアカ
22 ヤマシギ	43 ヒバリ(繁)	64 シロハラ(通)	87 ミヤマホオジロ
23 オオジシギ(繁)		65 ツグミ	88 シマアオジ

89	ア	オ	ジ (繁)
90	ク	ロ	ジ
<b>ア ト リ 科</b>			
91	ア	ト	リ
92	カ	ワ	ラ ヒ ワ
93	マ	ヒ	ワ
94	ベ	ニ	ヒ ワ
95	ハ	ギ	マ シ コ
96	ベ	ニ	マ シ コ (繁)
97	ウ		ソ
98	イ	カ	ル
99	シ		メ

<b>ハタオリドリ科</b>	
100	ニュウナイスズメ (繁)
101	スズメ
<b>ムクドリ科</b>	
102	コムクドリ (繁)
103	ムクドリ (繁)

<b>カラス科</b>	
104	カケス
105	ハシボソガラス (繁)
106	ハシブトガラス
以上 31科 106種	

☎087 根室市東梅249 TEL 01532(9)3905

### “筆者の高田勝さんについて”

本文にある通り、高田さんは民宿“風露荘”のオーナーです。民宿とは言え、世間にまかり通っている種類のそれとは大違い——まず最大収容人員が10名そこそこで完全予約制。それでいて料金は世間並み以下。根室駅まで行ってしまうと戻ることになるので、別当賀駅で下車した方がよい。事前に連絡して頼んでおくと、たいていは愛用のジープで迎えに来てくれる。著書に「ニムオロ原野の片隅から」(福音館 ¥1,100)がある。また続編とも言える「ある日原野で」が、3月中に朝日新聞社から出版される予定。  
(編集委員会)



## 松前町と野鳥

熊谷芳昭

◎はじめに松前町を紹介します。

松前町は、北海道最南端の町で観光の町でもありません。桜まつりには、本州や、札幌、室蘭、釧路方面の観光客が多く訪れ、夏は海水浴場でも道南で有名な町です。また松前町は、道南の中で一番野鳥の渡る姿を見れる場所と思います。それは、本州などから夏鳥が渡って来る時や、本州へ夏鳥が帰る時、青森県の竜飛崎から松前町の白神岬、弁天灯台周辺の地へ、また逆に竜飛崎周辺の地をめがけて飛んでいる様です。特に夏鳥が秋、空高く渡って行く姿をよく見かけます。それも、何百、何千羽というものすごい数の野鳥が、からりと晴れた早朝4時頃から8時頃にかけて、何回も何千何百羽の大群が鳴き交しながら飛んで行きます。毎年この時期になると朝早く起きて野鳥の渡る姿を見るのが楽しみになります。野鳥の渡って行く姿は黒い点ぐらいにしか見えませんが、野鳥が鳴きながら一生懸命渡って行く姿を見ると、また来年も来てくれよ!と言いたくなります。

◎松前町で見れる野鳥

ウミウ、オオセグロカモメ、ウミネコ、カルガモ、ハイタカ、ノスリ、トビ、チョウゲンボウ、コウライキジ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、フクロウ、ヨタカ、ヤマセミ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、アカモズ、カワガラス、ミソサザイ、コルリ、ノビタキ、ツグミ、ウグイス、コヨシキリ、オオヨシキリ、エゾムシクイ、キクイタダキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、ホオアカ、カンラダカ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラス、エゾライチョウ、イソヒヨドリ 以上61種

シギ、チドリ類などは不明

☎041 函館市日吉町3丁目21-15 日吉寮

# イカルチドリの繁殖記録

—観察日記から—

小野登志和

シマアオジを観察中、偶然、抱卵中のイカルチドリを発見した。北海道では初めての繁殖の確認なので、その観察日記の一部を発表します。

場所 帯広市内、十勝川、帯広川合流点附近

発見日 昭和53年6月22日

6月22日 くもり 風なし

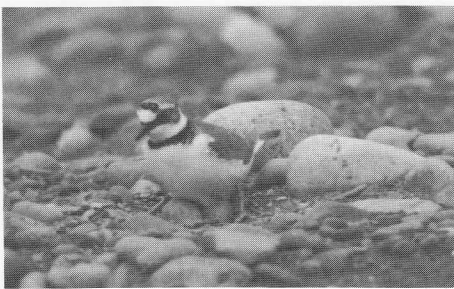
遠くの方から、今までと違ったシマアオジのさえずりが聞こえたので車で近づく。足早に歩くイカルチドリがいた。眼で追っていると、やがて地面にしゃがみこみ、そのまま動かないでいる。もしや巣ではないか？ 車から降りてゆっくり近づくと、イカルチドリは歩いてそこから離れた。やはり巣であった。淡いグレー地に、淡い茶斑点の卵が2個見える。体の割には大きい。巣といっても地面（砂地）を血状に浅く掘り、明らかに嘴で運んだと思われる。軽石状の、直径1mm～3mm位の小石10個位、それに経2mm、長さ2cm位の小枝6本を敷いた簡単なものである。車の中で待っていた所、間もなく先程の親が歩いて戻って来て、何の警戒のそぶりもなく、すぐ抱卵した。

6月28日 晴 猛暑 午後0時30分

抱卵中とはいっても、親は中腰のままで、何時まで見ても抱卵しようとはしない。巣の中の卵がはっきり見える。どうしたことだろう。原因はすぐわかった。それは、朝からの猛暑のため、地熱が40度を越していただろうし、抱卵を続けた場合、高温のため、卵の中で成長して来たヒナが死んでしまうことになる。親が腰を浮かせていたのは、風通しを良くして（今日は微風が吹いていた）卵の温度の上がるのを防ぐためと思われる。本能といえばそれまでであるが、このような状況に出くわすたびに、何時もなんともいえぬ感激をおぼえる。

7月2日 くもり 風なし

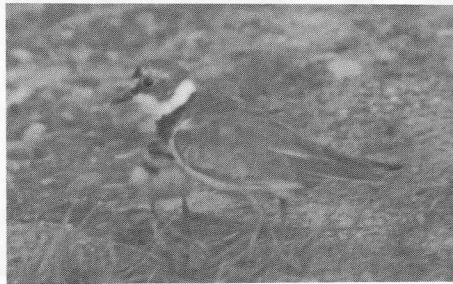
♀親抱卵中、間もなく♂親が鳴きながら飛んで来て、巣から5m位離れた所に降りた。すると直ぐ♀親は巣から5、6歩くらい歩いて、鳴かずに飛び立った。♂親は



歩いて来てゆっくり抱卵した。その後時々嘴で卵を動かしていた。約40分位経った頃、♀親が巣から5m位の所に近づいて来た。♂親は巣から5m位歩いて行き、そこから鳴きながら飛んで行った。♀親はもう抱卵していた。その後も二度♂♀の抱卵の交替を見たが、パターンは同じであった。そして大部分の抱卵時数は♀親が受持っていた。

7月8日 晴 風なし

巣に親の姿、それに卵もない。昨日ふ化したらしい。巣発見後16日目になる。♀親は巣から20m位離れた所に立っていて、時々、ピューイと鳴いているが、ヒナの姿が見当らない。若しかすると巣が何者かにおそわれたのかと、心配になる。然し、間もなく、体長3cm位の可愛いヒナ2羽が、親から10m位離れた草むらから出て来て、チョコチョコ歩きながら盛んに地面をつついていく。その中に、親に一羽のヒナが近づいたと思うと、腹の羽毛にもぐってしまい、2本の足だけが見える。然しもう一羽の方は、親がしきりに呼ぶが、なかなかいうことを聞かない。その中にイヤイヤ腹の下に収まった。その様子は、まさに駄々っ子な、あくたれ坊主そのもので、見ていて微笑ましかった。



その後、約20分位経った頃、親がヒナから離れた。ヒナはまた活発に動きまわり、地面から何かをついばんでいる。突然親が警戒音を出した。2羽のヒナは、大急ぎで草むらにかくれた。やがて親の合図で、ヒナは立ち上がり、親の方へ大急ぎで駆け出していった。なお、ヒナは自主的に行動しているように見えるが、巣の親の、次の三種類の指令によって行動していた。

○ママはここにいるよ——ピューイ、少ししてピューイ。

○ひる寝だよ——腹の下に来るまでピューイピッピを続ける。

○危い、隠れろ！——鋭く、ピーー、ピーーを連続。

☎080 帯広市大通り南11丁目



### (3) こんな写真を撮りたい

「俳諧は日ごろ工夫をつけて、席に臨みては気先きをもって吐くべし」。これは去来抄で語る芭蕉の極意であるが、生態写真も全く同じである。

良い写真を見ること。それ以上に生態写真の場合は「自分はこのような写真だけは撮りたくない」という悪い写真を日頃から見つめることが、私の場合役立っている。

そもそも鳥に魅力を感じるのは、自由に飛びまわられる面だ。私には絶対まね出来ない。いつも頭上を飛びまわる鳥を、いつか眼下に見おろして撮りたいと単純な発想を抱いている。でも、高い樹に登ったり崖の上から撮ることに短絡させるつもりもない。いつかは必ず私の眼の高さより下の地面すれすれに飛んでくれる鳥が現れようから、ましてモータードライブで盲撃ちした写真には全く関心もてない。はたして、いつ眼下の鳥を撮る日が来るのやら分らないが、その日を待っている。

クルックジャンクの「アメリカの鳥」に1枚素晴らしい写真がある。砂に写った自分の影を寂しそうに見つめているカモメの写真だ。「擬人化」といえばそれ切りだが、じっと鳥を見つめていると、時に「人格」を感じてくることは事実ある。こんな生き物同志の(一方的ではあるが)心の遊びが生態写真になってもよい筈だ。

動態を撮らんとするあまりに鳥にポーズをとらせる写

真家がいる。私にはできない。気長に待てば、動物は必ず動くものだ。あと味悪い思いを写真に残したくない。

私はあまりブラインドに隠れたくない。気づかぬ姿をコソコソ撮るのをあまり好まないからだ。じっと動きをこらえていると、鳥の方でこちらを意識しながら近づいて来る。向こうでもこちらを意識し、こちらでも見つめる。この関係を大切にしたい写真でありたい。鳥が安心して距離で撮ればのんびりした姿が写れるであろうし、こちらを意識して緊張していればその姿を撮ることができる。何れにしても、鳥にも接近して来る権利、そして逃げ出す権利があるのだ。私がブラインドを使いたがらない理由がここにある。

ストロボをやけに使う人がいる。写真だけに許される機能だが、私には無用の「光物」である。まるでやぶにらみの発想だが、暗い所の写真は「暗く」撮るべきだし、私の生態写真ではあのキラキラとどの鳥も皆クジャクみたいに写ってしまうストロボの機能は必要としない。

さて、私は一体どんな鳥の写真を撮りたいと思っているのだろうか。何とも言い切れない。ただ、文章で補わなければならない。いいわけを要する写真だけは撮りたくないと思っている。一枚の写真そのものに自分を託したいと考え続けているからだ。

☎039-01 江別市大麻南樹町1 道職A P 4-204

## チェックリストのその後

“チェックリスト”と言っても、ハテ何のこと?と思われる方もいるかも知れない。私達の知る限りでは、日本で初めての試みとして鳴り物入りでスタートしたものの、その後の反応は正直なところ、低調そのものと言わざるを得ない。本来ならば、毎年度末には寄せられたチェックリストを集計整理して中間報告するはずなのだが、とてもそんな段階に達しないまま年月が経過してしまっただ。

チェックリストがアメリカやヨーロッパ諸国のみか世界各国ですっかり定着して、野鳥の分布状態を知る上で欠かせない資料となっているのに刺激されたのが、そもそものきっかけであった。どうやら時期尚早だったかと感ずる一方で、まだまだ工夫の余地もありそうだ。

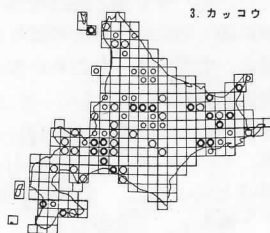
一言でいえば、“チェック”する習慣をどう身につけてもらうかに尽きるのではないか。たいていの観察者な

ら自分の野帳にはきちんと記録するのだから、あとはいかにチェックリストにも記入してもらい、送付してもらうかにかかっている。前段に関しては、基本的には記録をいかに“公”のものにするかに通ずる問題でもあるのだが、探鳥会のたびごとに参加者全員に配って馴染んでもらうことなど、差し当たり直ちに実行可能であろう。一方、送付してもらったにもかかわらず、もらい放しだった点は、率直に反省しなくてはなるまい。

チェックリストを集計して、北海道の分布図を完成させるという大それた事業は、取りあえず棚上げにして、チェックリストを日常のものとする過程ととらえ直して地道に取組む必要があるようだ。改めて全道の、とりわけ、会員数の多い在札会員の協力をお願いしたい。

詳しくは、本誌30号および31号をご覧ください。

チェックリスト班 小川 巖





# 藤の沢 56. 1. 25 10:00~14:30 小堀 煌治

藤の沢探鳥会はなぜか例年荒れ模様になるようです。今年もふぶきのうえスキーの車も多く、国道230号線は朝から渋滞、参加者の数が気になりましたが、このような悪条件にもめげず続々と参加者の数がふえ、常連にまじり新人の顔も多く上々のスタートでした。新聞に案内記事が出たせいもあるのでしょうか、ここの探鳥会は独特の根強い人気があるようです。集まった人達は早速重装備を解き、アカゲラやシジュウカラなど窓の外の給餌台に見入り歓声を上げていました。ひとしきり室内からの観察が続いた後、エネルギーをもて余した人たちの間から「外へ出て山を歩いてみよう」という意見が出て平井秀松氏を隊長につば足組4人、スキー組3人の藤野マナスル登山隊が結成されました。「ふぶいているの大丈夫かい」、「雪が深いから遭難しないように気をつけてね」、そんな心配と激励の声に送られて一行は元気に出発しました。残留組は黒くないスズメの意外な美しさに感心し、ひっきりなしに飛来するカラ類に見とれて楽しいひと時を過ごしました。今年の藤野はカラ類が種類も数も豊富で、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ここ数年不調だったヤマガラも姿を見せていました。小鳥たちを狙うハイタカのしゆう来もあり一瞬、

緊張しましたが幸い被害がなく一同ホットしました。無事下山したマナスル隊を万才で迎え、にぎやかな昼食が始まり、例年どおり参加者全員の自己紹介があり、アルコールの効き目もあったのか非常になごやかなムードになりました。このように藤の沢の探鳥会は、探鳥会というよりむしろ「探人会」、窓の外の鳥たちを肴に自然と人間、野鳥と人間を非科学的に語り合うのが楽しみです。春から秋にかけてのマジメな探鳥会も絶対必要ですが鳥閉期の冬の1日、こんな探鳥会も楽しいではありませんか。

(記録された鳥) ハイタカ アカゲラ ヒヨドリ ツグミ ハシブトガラ ヤマガラ シジュウカラ スズメ カケス ハシブトガラス (10種)

(参加者) 五十川祐弘・ハナ子 岩泉ゆう子 野村梧郎 萩 千賀 平井秀松・さち子 枋本健二郎・文子 清野久子 野々村菊 米山露子 早瀬広司 野口正男 金沢保三 藤谷昭典・光子 柳沢信雄・千代子 鈴木陽一 北尾 諭 曾根モト 長谷川涼子 谷口一芳・登志 渡辺紀久雄 井原重信 紅林雅文・幸子 山本一・とよ子 清水克幸・朋子 菅原豊子 羽田恭子 小沢広記 小山弘昭 小堀煌治 (38名)

(担当幹事) 小沢広記 平井さち子  
☎061-22 札幌市南区藤野278

# 野 幌 56. 2. 22 9:00~14:00 柳 沢 千 代 子

2月22日、この日は雪国でなければ、味わえないスキー探鳥会でした。朝、家を出る時は吹雪でしたが、集合場所の大森駅に着く頃には、うそのように晴れました。スキーの用意と、吹雪であったためか参加する人は、何時もの探鳥会より少なかった。

担当幹事を先頭にして、まるで真白いジュータンが続くような雪原、その上に、二本の線を引ながら森林公園目指して歩き始めました。まぶしく陽が輝く青い空に、ゆうゆうと舞うオジロワシの姿が目に入って来ました。尾の白さが光を通して透けて見えるのです。オジロワシが野幌で見られるのは、久しぶりのことでした。

林内に入ってからキバシリがよく出ました。体の色が木の幹にそっくりで、動かなければわからない程です。時々、近くの幹にやさしい声をたてながら止まり、幹を登ってくれました。吹雪いたり、晴れたり又、地吹雪になったりのくり返しでしたが、それでも私達は、冬にはあまり通らないユズリハコースを辿って行きました。

エナガの群れにも出逢いました。エナガはなんど見て

も、可愛らしく見あきない野鳥の一つです。名前も姿から付けられたといわれていますが、うまく付けたものと、今さらながら感心させられました。私達が近くいても、警戒することなく、この変りやすい天候のせいなのか、一時を惜しんで一生懸命に餌をとるのでした。

鳥の数、特に冬鳥が少なく淋しかったですが、それをカバーしてくれたすばらしい冬の自然と、身近に出逢った野鳥たちに別れを告げて、みな満足して帰路に着きました。

(記録された鳥) トビ オジロワシ ヤマゲラ アカゲラ コゲラ ヒヨドリ ツグミ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ キバシリ (14種)

(参加者) 柳沢信雄・千代子 早瀬広司 長谷川涼子 北尾 諭 土田純一 鶴崎展巨 萩 千賀 羽田恭子 五十川祐弘・ハナ子 村野紀雄・森・原・千草 (15名)

(担当幹事) 早瀬広司 北尾 諭  
☎003 札幌市白石区栄3丁目3-11

# 野幌森林公園を歩きましょう

4月20日(日) 雨 7名 37種

天気が悪かったせいか、参加者少数、鳥のほうは、カヤクグリやさえずり、トラツグミの姿、キバシリの巢

# 昭和55年度の記録 柳 沢 信 雄

作り観察と楽しめた。雨の中を歩いたかいたがあった。

5月25日(日) 快晴 21名 45種

探鳥会シーズンということもあって、初めての参加

者が多かった。カケス、イカル、キビタキの観察に時間をかけた。

6月15日(日) 曇、強風 20名 42種

北海道神宮祭と悪天候が重なったので、少数参加との予想を裏切って、意外に参加者多い。アカショウビン、カワセミを観察し、大変よろこぶ。

7月20日(日) 曇後晴 21名 39種

アオバズク、カワセミが出ておおいに満足する。

9月28日(日) 快晴、高温 15名 26種

野鳥の出現は思うにまかせなかったが、参加者に若い人が多く嬉しい。この中から将来のオンドリも出るのではないかと楽しみだ。

10月12日(日) 晴 18名 26種

紅葉絶景、観楓会みたい。美唄市、小樽市からの参加者もいる。又、菅野、野口両氏の元気な顔が揃いよろこぶ。ミソサザイ、カシラダカとノスリの渡りをみる。

11月24日(祭) 晴、低温 12名 21種

群との出会い少なく、少しさみしかったが、ギンザンマシコにあえたのがすくいとす。

12月7日(日) 晴後雪 12名 21種

大沢入口でヒレンジャクの群と出会う。途中でギンザンマシコをゆっくり観察できる。オス成鳥がみれた。大沢園地近くで吹雪となり、昼食もそこそこに、早めにきりあげる。

#### 「野幌森林公園を歩きましょう」について

毎号の「野鳥だより」探鳥会案内欄の下段に、〈野幌森林公園を歩きましょう〉とあるのを見ていただいていると思います。

これを、愛護会主催の探鳥会と区別するため、野幌私設探鳥会と呼んでいます。

この探鳥会は、現在、沖繩県・西表国立公園管理事務所長・百武充氏が、道に勤務していた頃、ちょうど北海道野鳥愛護会発足と同じ時期に、私信や愛護会の野鳥だよりで、野幌森林公園探鳥散歩を呼びかけたことがはじ

まりです。

当時は探鳥会が少なく、わずかに円山動物園が年に数回と、愛護会の月1回の探鳥会だけであった。

月1回の探鳥会だけでは物足りなく、それかといって1人では野鳥を探すことも思うにまかせず、やっと探した鳥も種名がわからず、誰か親切で熱心な指導者がいないかと待たれていた時期でもあったようだ。

百武氏のさそいに、最初は遠慮がちに参加していたが、回を重ねる毎にうちとけた会となり、常連もできてきた。

このような楽しい時期に突然、百武氏の転職転居となり、主をうしなった会となってしまった。

1夜、常連が集まり話し合った結果、主はいなくてもこの探鳥会だけは続けようということになった。この探鳥会を私達は「百武教室」とか「百武探鳥会」と呼んでいたが、その後、野幌私設探鳥会と呼ぶことにしたところ、野鳥だよりに掲載するのに私設では、との声もあり現在のような、〈野幌森林公園を歩きましょう〉となったのである。

野鳥をみようとする気持のある方ならどなたでも歓迎しています。参加も出られる時だけ、1回きりでも、とびとびでも、もちろん毎回参加でもかまいません。ただ、この探鳥会には特別な指導者はおりません。参加者がそれぞれ自分の力量に応じ、まったく気ままに探鳥するだけです。

観察のポイントを聞きかたたり、観察中に疑問がでたら、まわりの人に聞くのもよいし、話すのがきらいな人は一言も声を出さなくてもかまいません。

私達としては、自然観察のマナーを大事にする肩のこらない探鳥会と心がけています。

56年度も4月から歩きはじめます。野鳥だより探鳥会案内欄をごらんになる時、〈野幌森林公園を歩きましょう〉もごらんくださいませ、一度だけでも参加してみてください。 ☎003 札幌市白石区栄通8丁目3-11

## 新年懇談会報告

1月24日、13:30~16:30、北海道婦人文化会館で、恒例の新年懇談会が開かれた。

当日、新宮康生幹事の司会で、出席者が順に野鳥観察の近況報告をかねた自己紹介から始まった。遠く、十勝や苫小牧から貴重な記録スライドを持参で参加下さった小野登志和氏、佐藤辰夫氏のおかげで懇談会は一段と盛りあがりを見た。

自己紹介のあと、村野紀雄氏に野幌森林公園の植物スライドをていねいな解説つきで見せていただき、ついで小野氏には十勝のイカルチドリ、タンチョウの繁

殖記録を、佐藤氏はウトナイ、日高海岸のカナダヅル、チンマンギ、江別の藤林氏はアオバト、アカショウビン、札幌の山本氏はチゴハヤブサの繁殖記録と、それぞれ貴重なスライドをみせてくださり、くつろいだ雰囲気の中で楽しく有意義に終わった。

〈参加者〉 北尾 諭、小野登志和、さとう実、松野恭子、中山慶子、曾根モト、佐藤辰夫、藤林忠雄、橋本文子、渡部 幸、谷口一芳、坂本正雄、菅原豊子、平井さち子、山本 一、久保田共子、村野紀雄、早瀬広司、新宮康生、羽田恭子、岩泉ゆう子、紅林雅文・幸子、萩 千賀、小川 巖、山本庸子、清田吉晴・信子、豊島博男、柳沢信雄・千代子(記名順)

柳 沢 信 雄

## 探鳥会案内 —56年度分—

(各季の野鳥だよりもに掲載します)

次のように探鳥会を予定しています。お気軽にご参加ください。

月日	場所	集合
56. 4.26	野幌森林公園	午前8時30分 国鉄大麻駅
5.10	〃	〃
6. 7	植苗、 ウトナイ湖	午前9時 国鉄千才線植苗駅
7. 5	東区、福移	午前8時30分 札幌市営バス 植苗線福移入り口停留所
8.30	鶴川	午前9時10分 国鉄日高線鶴川駅
9.20	〃	〃

10.25	野幌森林公園	午前8時30分 国鉄大麻駅
11.15	ウトナイ湖	午前10時 ウトナイ遊園地
12.13	小樽港	午前10時 国鉄小樽駅待合室
57. 1.24	藤の沢	午前10時 南区藤の沢白鳥園
2.21	野幌森林公園	午前9時 国鉄大麻駅
3.28	ウトナイ湖	午前10時30分ウトナイ遊園地

上記のほか、野幌森林公園で探鳥散歩を行います。  
午前8時30分 大麻駅集合です。

4月19日 5月24日 6月14日 7月19日  
9月27日 10月11日 11月22日 12月6日

- ・ひどい暴風雨でないかぎり行います。
- ・昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。
- ・探鳥会についてのお問い合わせは 柳沢 851-6364 へ



### 昭和56年度の総会について

次のように開催します。会員の皆様のご出席をお願いします。

1. とき 昭和56年4月25日  
午後2時から
2. ところ 北海道婦人文化会館(北1西7)
3. 議題 55年度事業実施及び会計報告  
56年度事業計画及び予算  
役員改選 その他

**野鳥写真展について** 5月11日～30日に、札幌駅前の三菱信託銀行(北4西4)ロビーで開催予定。

お手持ちの写真を次の内容により、5月1日まで事務局にお寄せください。

できるだけ多くの会員の写真で、愛鳥週間を盛りあげましょう。

(募集写真内容) 探鳥風景や山、野、水辺、庭などの鳥の写真。野鳥を脅かしているようなものは避ける。サイズは原則として4切～半切。カラー・白黒いづれも可。

なお、展示写真は、パネル張り(スチール額)にしてお返しする予定です。(特に謝礼はありません)

**鳥学セミナーについて** 本年1月に第1回が札幌市南区の藤の沢で、第2回が2月に千歳市の公民館で開

催されました。第2回では、北海道鳥学研究史(その1)についての講演(講師・小川巖さん)や事例紹介、よろず相談(相談員・正富宏之さん)などがあり、90余名の参加があって盛会でした。第2回は千歳野鳥の会主催でしたが、セミナー事務局では今後も色々な会と連携をとりながら学びの輪を広げてゆくそうです。セミナー事務局は次のとおりです。

北海道鳥学セミナー事務局 069-01 江別市  
大麻南樹町1 道職A P 4-204 小山政弘方

**寄贈文献** 55年中には、次の文献の寄贈を受けました。

- 釧路市立郷土博物館報 No.259・260(釧路市郷土博物館)
- 第8回環境週間記念親子記者レポート集～よりよい環境を求めて～(北海道新生活運動協会)
- 野鳥さいたま No.19～21(日本野鳥の会埼玉県支部)
- 比羅夫野鳥新聞 No.49・50(比羅夫小学校野鳥を守る会)
- 干潟を守る No.28～32(千葉の干潟を守る会)
- 北の野鳥 No.15(旭川野鳥の会)
- 野鳥ニュース '80年5月号、8月号 '81年1月号(白老町立飛生小学校飛生野鳥を守る会)
- キツツキ 創刊号(日本野鳥の会室蘭支部)
- かつこう No.7(日本野鳥の会札幌支部)

### 〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

草原を疾駆する乗用車、とある湖畔で止まったその車から粹な? ウォッチングスタイルの親子が姿を現す。そんなテレビコマーシャルが普通になりました。何か変だなと思いつつも野鳥に親しむ人々は確実に

増えてきていることを感じさせられます。しかし探鳥者の層はまだまだ薄く、本誌への寄稿者も限られています。本会の会員、現在400人弱、もつとこの輪を広げられる筈ですが……。今年はトリ年。(村野記)



〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 18287  
☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465